

小冊子類の小売価格

——一六八〇年頃のロンドンの事情——

はじめに

本稿は、一六八〇年頃ロンドンで販売されたパンフレット pamphlet とブロードサイド broadside (以下、両者をまとめて「小冊子類」と略す)の小売価格について、その特徴を説明することを目的とする。

近世ヨーロッパ社会において、印刷物が思想の公表と流通に果たした役割は大きい。中でも小冊子類は広く人口に膾炙するための便利な媒体であった。イギリス・ピューリタン革命中、王党派や議党派、ピューリタン各派が己の思想・信念・主張を表明し、敵を論難したのも小冊子類の紙上であった。一六七八年の「カトリック陰謀事件」に端を発し、排斥法危機へと至る一連の政治的混乱もまた無数の

石井健

小冊子類の出版と流通によって引き起こされ増幅されたと言つてよい。

小冊子類がこれほどの影響力をもった要因は何であったのか。一般には、その価格の安さであったと説明される。誰でも手に取れる値段であったから、広範な読者層を形成しえたというのである。だが、実際のところ、小冊子類は安かったのだろうか。多くの人が、なかならずく下層民衆が手を出しやすいほどの値段だったのだろうか。これまでの研究史を見る限り、この問題に関する実証研究は残念ながら見あたらない。本稿はこの点をささやかながら実証したいと思う。

以下、本稿で使用する史料について簡単に解説したあと、小冊子類の小売価格の特徴を一覧し、最後に当時のロンド

ンの食料価格や賃金などと比較して小冊子類が本当に安かったかどうかを考察する。

1 『平とじ本と一枚物の完全な目録』

一六八〇年初頭、『カトリック陰謀事件の最初の発覚(一六七八年九月)』以来一六八〇年一月までに印刷された平とじ本と一枚物の完全な目録(以下『目録』と略す)という名のパンフレットが出版された。カトリック陰謀事件に端を発する政治的危機の時期に出版された大量の政治的印刷物を目録にしたものである。その後、同年一月一日から六月二五日までの分が『一六七八年九月のカトリック陰謀事件の最初の発覚以来印刷された平とじ本と一枚物の完全な目録の続編』(以下『続編』と略す)として出版され、さらに六月二四日からミケルマス・タームまでの分が『カトリック陰謀事件の最初の発覚(一六七八年九月)』以来印刷された平とじ本と一枚物の完全な目録の続編二(以下『続編二』と略す)として出版された。標題紙にはその後も半年ごとに同種の目録を出版する予定であることが述べられていたが、実際には四巻目以降の出版はなかった。その代わり、これら三冊を合冊して『カトリック陰謀

事件の最初の発覚(一六七八年九月)から一六八〇年ミケルマス・タームまでの過去二年間に印刷された平とじ本と一枚物の総目録』という別の標題紙を付けたもの(以下『総目録』と略す)が同じ年に再発行された。⁽³⁾ いずれも四折判で、『目録』は三二頁、『続編』は二四頁、『続編二』は本文二六頁と広告が二頁。『ターム・カタログズ』の一六八〇年ヒラリー・ターム号によると『目録』は一部六ペンス、同年トリニティー・ターム号によると『続編』は四ペンスである。⁽⁴⁾ 編者・出版者は不明である。

さて、『総目録』の標題紙には「コレクションを作るという紳士諸氏に大変便利」という宣伝文が載せられているが、まさにその目的で利用されたと思われるコピーがブリティッシュ・ライブラリーに現存している。請求記号「18a3」と付けられたコピーがそれで、『総目録』そのものではなく、『目録』、『続編』、『続編二』の三分冊を一冊に合本にしたものである。そして、その『続編』と『続編二』には本来の頁と頁の間に白紙が挿入されてとじ直されており、本紙余白や白紙には各書誌毎に購入年月日と価格が書き入れられ、時には出版物についての簡単な問題が付されている。この手沢本を製作し書き入れを行った旧蔵者

は、現在のところ、一七世紀末から一八世紀初頭にかけて活躍した著名な日記作家で書誌学者のナーシサス・ラトレル (Narcissus Luttrell, 1657-1732) だといわれている(以下、ラトレルの書き入れのある『続編』と『続編二』をまとめて「ラトレル手沢本」と略す⁽⁵⁾)。

本稿ではこのラトレル手沢本を史料とし、二節以降でそこに書き入れられた価格データを分析して、小冊子類の小売価格の特徴を明らかにするのであるが、その前にこの史料について二点確認しておく。一点目は、ラトレル手沢本に書き入れられた価格が当該小冊子類の発売当時の小売価格であったかどうかという点である。これについては、ラトレル手沢本に書き入れられた購入年月日が、その小冊子類が出版された年と一致しているか、少なくとも目録が出版された一六八〇年より後の年の例がないことから、問題の価格は出版された当時からそれほど離れていない時期のものであり、新刊本の小売価格であったと推測できる。

二点目。ラトレル手沢本採録の出版物は、本主にタイトルどおり、全てが平とじ本と一枚物、パンフレットとブロードサイドであったのか⁽⁶⁾。ラトレル手沢本には用紙枚数データの あるものが五七九点あるが、そのうち最大枚数は

二四枚で、それはジョン・タップの『水夫の暦』であった。これは四折判であるから、一九二頁にもなり、決して「パンフレット」とはいえない代物である。一七一一年のスタンプ法では、用紙一枚以上のパンフレットに一枚あたり二シリングが課税されたが、そのときのパンフレットの定義は二折判で二〇枚以下、四折判で一二枚以下、八折判以下で六枚以下のものとされていた。フォクソンによれば、この定義は一七世紀中もほぼ当てはまっていたという⁽⁷⁾。そうであるとするとラトレル手沢本は当時の通念では「パンフレット」に当てはまらないものまでも「パンフレット」として採録したことになる。しかし、ラトレル手沢本に採録されたがこの定義に当てはまらない「パンフレット」は二折判で二点、四折判で五点、八折判で二点のみである。したがって、ラトレル手沢本採録の出版物はほぼ小冊子類であったといえよう。

2 小冊子類の小売価格

(1) 全体の傾向

ラトレル手沢本はカトリック陰謀事件に関係する印刷物であればどのようなジャンルのものであっても含んでおり、

具体的には、詩、説教、国王の布告から当時発刊された短命な各種新聞まで含んでいる。その内訳は、ラトレル手沢本の分類にしたがえば、陰謀事件関係七五点、詩一〇九点、雑三三六点、説教四六六点、布告一六六六点、新聞二二紙である。各出版物の書誌はジャンル、判型、著者名と書名(著者名はない場合も多い)、出版地(ロンドン以外の場合)、出版者(『統編二』のみ)、出版年(主に『統編七』)、用紙枚数からなっており、各々は主題別・判型順に並んでいる。

ラトレル手沢本採録の小冊子類五八二点(新聞を除く)の内、ラトレルの書き入れにより価格がわかるものは五七七点ある。判型別には、ブロードサイドが一四三三点(二五%)、二折判パンフレットが二〇九二点(三六%)、四折判が二〇八二点(三六%)、八折判が一七二点(三%)である。⁽⁸⁾パンフレットといっても比較的大型の本がほとんどであることがわかる。また、用紙枚数を見ると、データのあるもの五七九点のうち用紙一枚のものがブロードサイド、パンフレット合わせて三二〇点(うち HALF・シートが五〇点)あり、次いで五枚のものが五五五点、二枚のものが三八八点、四枚半が三〇〇点等々となっている。最大枚数は二四枚、ジョン・タップの『水夫の暦』であることはすでに触れた。

用紙枚数を考慮せずにみた場合、小売価格の最安値は三ファージング(=三/四ペニー)であり、『新リリーの予言』四折判、一枚八頁。Wing L2233⁽⁹⁾、最高値は二シリング六ペンスである(『二つの自由会議の関係』四折判、五枚四〇頁。Wing R893⁽⁹⁾)。全体の約半分が一ペニーで、次いで六ペンス(二四%)、二ペンス(二〇%)の順に多い。また、六の倍数に当たる価格(二ペンス、一八ペンス、二四ペンスなど)にデータが集まりやすい特徴を示している(表一)。

判型別に見ると、ブロードサイドではその八二%が一ペニーであり、一〇%が二ペンスであったが、一枚一シリングという高価なものもあった。これはサー・ロジャー・レストレンジ(Sir Roger L'Estrange)の『委員会』⁽¹⁰⁾または見せかけのカトリック』(Wing L1226)で、ラトレル手沢本によると銅版画付であった。二折判では、五八%が一ペニー、二ペンスと六ペンスがそれぞれ一二%ずつ、七%が二ペンスだった。ブロードサイドよりも一ペニーものの割合が減っているが、それでも過半数を占めていた。四折判では、四九%が六ペンス、一八%が一ペニーであり、一ペニーものの比率がかなり低くなっている。そして八折

(25) 小冊子類の小売価格

表1 判型別価格一覧

価格 (d.)	ブロードサイ ド %		パンフレット						合 計 %	
			二折判 %		四折判 %		八折判 %			
	143	100.0	209	100.0	208	100.0	17	100.0	577	100.0
3/4	0	0.0	0	0.0	1	0.5	0	0.0	1	0.2
1	117	81.8	121	57.9	38	18.3	5	29.4	281	48.7
2	14	9.8	26	12.4	16	7.7	1	5.9	57	9.9
3~5	6	4.2	8	3.8	29	12.5	3	17.6	43	7.5
6	5	3.5	25	12.0	101	48.6	5	29.4	136	23.6
7~10	0	0.0	3	1.4	4	1.9	0	0.0	7	1.2
12	1	0.7	14	6.7	16	7.7	2	11.8	33	5.7
15~30	0	0.0	12	5.7	6	2.9	1	5.9	19	3.3

原典 本文参照。

判では、一ペニーと六ペンスがそれぞれ二九%ずつ、四ペンスが一八%、一二ペンスが一二%であった。

次に価格と用紙枚数との関係である(表2)。両者の数値が与えられているデータ五七五件のうち、五四%を占める用紙一枚の小冊子類では、その九〇%が一ペニーであった。用紙が一〜六枚(全体の三五%)のものでは、その五九%が六ペンスであり、二〇%が二ペンス、九%が三ペンスであった。用紙六〜二枚(全体の八%)では、六〇%が一ニペンス、二二%が六ペンスであり、二二枚〜一八枚(二%)では、五〇%が一八ペンス、四〇%が二四ペンス、一八〜二四枚(二%)では、その六〇%が二四ペンスであった。つまり、用紙枚数が増えたと価格もあがり、しかも用紙枚数の増加にほぼ比例して価格も上昇していることが表から読みとれる。また、用紙が一枚のものは、判型に限らず、一ペニーであることが多いこともわかる。

そこで、用紙一枚当たりの価格を求めると、その五八%が一ペニー、二六%が一〜一・五ペンスであった。また二ペンス以下のものが実に九六%を占め、平均値は一・二五ペンス、中央値は一・〇〇ペニーであった(表3)。ただし、ラトレル手沢本上に図版付と記述のあるもの七点(す

表2 用紙枚数別価格一覧

用紙枚数	1枚		6枚以下		12枚以下		18枚以下		24枚以下	
		%		%		%		%		%
価格(d.)	310	100.0	203	100.0	47	100.0	10	100.0	5	100.0
3/4	1	0.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
1	279	90.0	2	1.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
2	17	5.5	40	19.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0
3~5	7	2.3	35	17.2	1	2.1	0	0.0	0	0.0
6	5	1.6	119	58.6	10	21.3	0	0.0	0	0.0
7~10	0	0.0	3	1.5	4	8.5	0	0.0	0	0.0
12	1	0.3	2	1.0	28	59.6	1	10.0	1	20.0
15~30	0	0.0	2	1.0	4	8.5	9	90.0	4	80.0

原典 本文参照。

表3 一枚当たりの価格一覧(判型別)

d./sheet	ブロードサイド		パンフレット						合計	
		%	二折判	%	四折判	%	八折判	%		%
	143	100.0	209	100.0	206	100.0	17	100.0	575	100.0
0.5	0	0.0	1	0.5	0	0.0	0	0.0	1	0.2
0.5<1	0	0.0	1	0.5	20	9.7	1	5.9	22	3.8
1	120	83.9	149	71.3	58	28.2	7	41.2	334	58.1
1<1.50	0	0.0	41	19.6	105	51.0	4	23.5	150	26.1
1.5	0	0.0	9	4.3	13	6.3	1	5.9	23	4.0
1.5<2	0	0.0	0	0.0	3	1.5	1	5.9	4	0.7
2	11	7.7	5	2.4	2	1.0	1	5.9	19	3.3
2<	12	8.4	3	1.4	5	2.4	2	11.8	22	3.8

原典 本文参照。

べてブロードサイド)を除いた場合の平均価格は一・一八ペンスとなる。また判型別に見た場合、ブロードサイドではその八四%が一ペニーであり、二折判でも七二%が一ペニーであるが、四折判ではその五二%が一・一五ペンスでやや高めになっている。平均値と中央値は、ブロードサイドがそれぞれ一・四二ペンス(図版付を除くと一・一八ペンス)と一・〇〇ペニー、二折判が一・二二ペンスと一・〇〇ペニー、四折判が一・二三ペンスと一・二〇ペンス、八折判が一・三八ペンスと一・〇四ペンスであった。

まとめると、ラトレル手沢本採録の小冊子類の小売価格のうち、最安値は三/四ペニー、最高値は二シリング六ペンス、全体の半分が一ペニーであり、その他六の倍数の価格が多い。特にブロードサイドではその八割が一枚一ペニーであり、二折判でも六割弱が一冊一ペニーであった。他方四折判では一冊六ペンスが半分弱を占めていた。次に、用紙枚数と価格を比べると両者の間に比例関係が存在し、一枚あたりの価格を算出すると、六割弱が一ペニー、四分の一が一・一五ペンスで、平均値は一・二五ペンスであった。なお、図版があると小売価格は高くなる傾向にあり、この分を除いた平均小売価格は一枚あたり一・一八ペ

ンスであった。

(2) ジャンル別の特徴

ジャンルによって本の仕立てや価格に特徴がみられる(表4)。

ラトレル手沢本に採録された〈布告〉一六点のうち一〇点は国王の布告であるが、これらは一枚ないし二枚の片面刷りブロードサイドであった。その他、このジャンルには国王の宣言文一点、国王の演説二点、枢密院での国王の勅令三点があるが、勅令はブロードサイド、残りはパンフレットで出版された。しかしその価格はいずれも一枚当たり一ペニーであった。フランスス・R・ジョンソンは、法令・勅令・布告、法律書やその関係書の印刷・出版は国王印刷人 King's printer の独占となっているため、その小売価格は一般に市場価格よりも高くなる傾向にあると指摘しているが、⁽¹²⁾ここでのデータは必ずしもそのような特徴を示していない。むしろ、布告・勅令といった出版物は広く一般に周知を計るべき文書であるため、ブロードサイドという出版形態を利用するなどして、小売価格を低く抑えようとしていたのではないだろうか。

表4 一枚当たりの価格一覧(ジャンル別)

d./sheet	陰謀事件関係		詩		雑		説教		布告	
	75	100.0	109	100.0	330	100.0	45	100.0	16	100.0
0.5	0	0.0	0	0.0	1	0.3	0	0.0	0	0.0
0.5<1	1	1.3	1	0.9	12	3.6	8	17.8	0	0.0
1	32	42.7	84	77.1	199	60.3	3	6.7	16	100.0
1<1.5	31	41.3	7	6.4	83	25.2	29	64.4	0	0.0
1.5	3	4.0	1	0.9	14	4.2	5	11.1	0	0.0
1.5<2	0	0.0	1	0.9	3	0.9	0	0.0	0	0.0
2	2	2.7	7	6.4	10	3.0	0	0.0	0	0.0
2<	6	8.0	8	7.3	8	2.4	0	0.0	0	0.0

原典 本文参照。

陰謀事件関係の小冊子類七五点の場合、五四点が二折判のパンフレットで、用紙枚数は一枚から一七枚まで多様であった。小売価格は一枚当たり一・五ペンスで、平均値は一・三五ペンス。ただし、用紙枚数が一枚では一ペニーだが、枚数が増えると一枚当たりの価格は上がり、用紙枚数が一〇枚以上のパンフレットでは、一枚当たり平均一・四五ペンスとなる。内容別にもう少し細かく見ると、論争書一一点、裁判記録一三点、事件報道一五点、関係者の書簡集八点、関係者の伝記四点、請願三点、その他二一点となる。このうち平均価格が最も高いのは事件報道で一枚当たり一・五〇ペンス、次いで裁判記録の一・四二ペンス。ジャンルの平均価格一・三五ペンスを上回っているのはこの二つである。ただし、銅版画付のブロードサイド『陰謀の失敗への教皇の悲しい哀歌』(Wing P2830)が一枚六ペンスするため、事件報道の平均値を押し上げている。これを除くと一・一八ペンスとなつてさほど高くはない。裁判記録の場合には、用紙が九枚以上のものが六点で、価格も一〜二シリングと高い。

詩の場合、その大半はブロードサイドで、やはり一枚あたり一ペニーである。しかし中には、一枚一シリングで売

られていたレストレンジの『委員会』もあり、全体の平均値も一・四一ペンスとやや高めになっている。ちなみにラトル手沢本に「図版付き」、「銅版画付」と記述のあるブロードサイドの詩が全部で五点あるが、これらの平均価格は六・二〇ペンスであるのに対しこれらを除いたブロードサイド八四点の平均価格は一・一九ペンスとなる。ジョンソンの指摘通り図版の有無が書物価格に大きな影響を与えることがわかる。パンフレットで発売されたものは、一枚当たり平均一・一六〜一・一八ペンスで、図版なしのブロードサイドの平均価格に近い。

説教は、そのすべてが四折判のパンフレットであった。用紙枚数は一枚から一一枚まで幅があるが、四〜五枚のパンフレットが二九点あり、このジャンル全体の二／三近くを占める。そして、全体の八五％が六ペンスで売られている。一枚当たり一〜一・五ペンスではあるが、二割が一ペニー未満であった。平均値は一・一六ペンス、五枚以下では一枚あたり一・二四ペンスであるが、五枚以上では〇・九六ペニーと逆に安くなる。

新聞二一紙はハーフ・シートかクォーター・シートで出版され、ハーフ・シートの場合には一部一ペニー、クォー

ター・シートは半ペニーであった。例えば、代表的な『ロンドン・ガゼット』誌は週二回、月曜と木曜にハーフ・シート一枚で発行され一部一ペニー、『週刊死亡表』は毎週木曜午前にクォーター・シートで発行され一部半ペニーであった。

以上をまとめると、布告や勅令、詩、新聞といったブロードサイドで出版されたものは一枚一ペニーであるが、用紙数枚のパンフレットで出版された陰謀事件関係書や説教は一冊あたり六ペンス以上となっている。言い換えるとより詳しい記述や主張を盛り込む必要のあるジャンルは出版形態としてブロードサイドよりはパンフレットを取るものが多く、その分一冊あたりの小売価格は高くなるというよう。

(3) 食料価格、賃金及び食費との比較

小冊子類の価格が安かったかどうかを確かめるため、ここでは食料価格、男性労働者の賃金、そして下層階級の食費との比較を試みる。なお、本来であればロンドン下層階級の一世帯あたりの家計と比較するのが望ましいが、それを再構築するにはさまざまな要素を個別に探求して組み立

てる必要がある、しかも要素の中には、例えば、平均的な労働者の年間雇用日数、年間の被服費など、史料的に探求が困難なため十分に研究が進んでいない点を多く含むため、今回は男性労働者の日払い賃金および貧民一人あたりの食費との比較にとどめる。

ロンドンの食料価格についてはポルトンの価格系列が利用できる。これはロンドンのリヴァリ・カンパニーや病院などの会計簿から価格データを収集したものである。この系列には、データの多くを少数のカンパニーや病院などの会計簿に依拠している点や調査対象期間の全期間を網羅する史料がほとんどない点などで史料的に問題がある⁽¹⁴⁾ので、データの誤差を小さくするため、本稿ではポルトンの価格系列から一七世紀後半の平均価格を求めて、これを比較の材料とする。

すると、一七世紀後半のロンドンにおける食料の平均価格は次のようになる。パン一斤(四ポンド)が平均で六・一二ペンス、エール一パイントが〇・八〇ペニー、牛肉一ポンドが三・二五ペンス、バター一ポンドが七・三七ペンス、卵一ダースが七・九四ペンス。ブロードサイド一枚一ペニーとすると、約六枚でパン一斤が買え、一枚分でエー

ルが一パイントちょっとを飲めた計算である。また、用紙一枚一・二五ペンスとすると、パン一斤は用紙約五枚に相当し、エール一パイント半が約一枚に相当した。同様に、牛肉一ポンドが用紙二枚半、バター一ポンドが六枚、卵二個が一枚に相当した。さらに図版なし書物の平均価格である一・一八ペンスで換算すると、パン一斤は五枚少々、エール一パイント半が約一枚、牛肉一ポンドが三枚弱、バター一ポンドが六枚ちょっと、卵二個が約一枚であった⁽¹⁵⁾。

パンの原料である小麦粉を買う場合には、一ブッシュェルあたり九・三七シリングであった。これは用紙九〇枚分(図版なしなら九五枚分)に相当した。兎や鶏はそれぞれ一羽一〇・一四ペンスと一三・一七ペンスで、用紙八枚(同じく八枚半)と一〇枚半(一二枚)になり、砂糖は一ポンドあたり九・四〇ペンスで、用紙七・五枚(八枚)相当であった。

男性未熟練労働者の賃金の動向はポルトンの賃金系列からわかる。それによれば、ロンドンの労働者の日払い賃金は一七世紀初頭一二ペンスだったのが、一六一〇年代に一四ペンス、一六二〇～三〇年代一六ペンス、一六四〇年代一八ペンス、一六五〇年代二〇ペンスと上昇を続け、その

後一六八〇年代まで二〇ペンスのままであったが、一六九〇年代に二四ペンスへと再び上昇した。⁽¹⁶⁾したがって、本稿が問題とする一六八〇年頃の男性労働者の日払い賃金は二〇ペンスとなるが、これはつまり用紙一枚一・二五ペンスの場合に一六枚相当となる。

ロンドン下層階級の一日の食費については、一七世紀後半に関して信頼に足る研究が見あたらないので、ここでは一六世紀末に関するアーチャーの研究を利用する。アーチャーは残存史料からロンドン貧困世帯の「典型」として寡婦を世帯主とする世帯の家計構造を再構築している。そのうち食費については、一六〇〇年にブライドウェル病院に収容されていた貧民の食事シートに基づいている。このシートの分析結果によると、未就労の貧民一人当たりの一日の必要最低摂取量は、パンが一・二〇オンス、ビールが一クォート、牛肉が四オンス、チーズが〇・八三オンスかバターが〇・四二オンスであった。これらの合計は一五九〇年代中頃の価格で約二ペンスになった。また、紡績工の場合、パンの消費量が一六オンスになり、総額は二ペンス一ファージングになった。⁽¹⁷⁾

このアーチャーの食料消費パターンとボルトンの価格系

列を組み合わせ、一六七〇〜九〇年代の就労貧民一人あたりの食費を推計してみる。⁽¹⁸⁾ただし、食料の最低摂取量と構成は一五九〇年代と一六七〇〜九〇年代で同じであったと仮定し、またアーチャーの食事シートのうち、ビールとチーズについてはボルトンの価格系列には存在しないため、ボルトン同様⁽¹⁹⁾ビールはエールで代替し、チーズはバター⁽¹⁹⁾の量で調整する。すると、一日あたりの食費は一六七〇年代で四・三二ペンス、一六八〇年代で四・三〇ペンス、一六九〇年代で四・七四ペンスとなる。つまり、一日の食費は用紙一枚一・二五ペンスで三・四〇〜三・八枚、一・一八ペンスで三・六〜四枚に相当していたことになる。用紙三〜四枚程度のパンフレットを一冊購入すると、その日一日の食費を支出したのと同じになってしまう。

以上、小冊子類の小売価格を三つの指標と比較したが、その結果を整理すると次の通りである。食料価格と比べた場合、用紙五〜六枚のパンフレット一冊がパン一斤相当、一枚一ペニーのブロードサイドがエール一パイント相当ということ、用紙枚数が少なければ日常の食料品程度の価格で購入することが出来る。他方、男性未熟練労働者の日払い賃金と貧民一人当たりの一日の食費との

比較結果から考えられるのは、グレゴリー・キングがイギリス国民の半数を占めていたという下層階級にとつて、一日の食費を越すような用紙枚数のパンフレット(たとえば説教本など)を購入するのは決して簡単なことではなかったであろうということである。したがって中産階級以上の人々とはちがく、下層階級の人々にとっては、小冊子類は用紙枚数次第では決して「安かった」とは言い切れないのではないだろうか。しかしそうであればこそ一部一ペニーの小冊子類が非常に多かった点は重要である。つまり、この価格設定が下層階級の中により広範な読者を見つけるためのものであったとも考えられるからである。特に定期的に発行される新聞が一枚一ペニーないし半ペニーであったことは、この点を裏付けるものと言えよう。

むすび

一六八〇年頃のロンドンにおいて、新刊本のブロードサイドやパンフレットは用紙一枚当たり一ペニーちょっと(図版なしで平均一・一八ペニー)の価格で売られていた。特に一枚物のブロードサイドはふつう一枚一ペニーで市中に出回っていた。これは当時の物価ではちょうどエールが

一ポイント弱飲めるのとはほぼ同じ値段であった。

サミュエル・ピープスの日記には、彼がしばしば日中から酒場に出かけ、ビールやエール、ワインなどを飲む場面が登場するが、彼のような生活水準の人々にとっては小冊子類は「安い印刷物」であっただろう。しかし下層階級の人々にとっては、これは用紙枚数によって「安い印刷物」ではなかった。最低限の食費が一人あたり一日四ペンス強、男性未熟練労働者の日払い賃金が二〇ペンスであった彼らの生活で、用紙が四〜五枚で一部六ペンスもするような説教の本などはそう容易には手の出せる代物ではなかっただろう。せいぜいブロードサイドか用紙一枚のパンフレット(内容によっては「ヘチャップ・ブック」と呼んでもよいかもしれない)が手の出せる範囲ではなかったか。ラトレル手沢本採録の小冊子類の半分強が用紙一枚であり、そのうちの八割が一ペニーであったという事実、そして同じ値段でエールが一ポイント飲めたという事実は、こうした下層階級の読者層を意識したものであったとも考えられるであろう。つまり、この値段が下層階級にとつても「手頃な」価格とみなされていたということである。

そうであるとすると、本稿冒頭の問い、小冊子類は安

かったのかという問いはさしあたり次のように答えられるだろう。すなわち、一六八〇年のロンドンでは、用紙枚数が一部一枚の小冊子類ほどの階層にとっても入手可能であり、下層階級の人々にとっては必ずしも安いとは言えないとしても少なくとも「手頃な」価格ではあったと考えられる。その一方、一部あたりの用紙枚数が増えると、そうした小冊子類は手頃さを失い、手の届きづらいものになっていくであろう、と。もちろん、上の階級の人々にとっては枚数の少ない小冊子類は安かったであろうが、どれぐらいの枚数までの小冊子類が安かったかは、その人の生活水準に対応したものであっただろう。

本稿の取り扱った時期は場所も時間も限られており、より広い領域で、またより長期の価格変動の中で論じなければ、小冊子類一般についての結論を得られないことは当然である。したがって、この点については次の課題として残される。本稿冒頭で「ささやかな実証」と断ったのはこの意味である。

そしてもう一つ、下層階級の人々にとっても入手可能であったからといって、彼らが実際に購入したかどうかはまた別の問題である。また、当然ながら実際に読んだかどうか

かの問題も別である。コーヒーハウスでの新聞の閲覧のように、自分では購入せずとも、人から借りて読んだということもあるだろうし、朗読の伝統が生きた社会では、人から読み聞かせられるということもあっただろう⁽²⁾。しかしながら、下層階級でも入手可能な値段で売られていたという事実は、そうした読書習慣と相まって、小冊子類に対する広大な潜在的読者層、読書市場の存在を暗示するものと言えよう。その意味で、小冊子類、特にへ一枚ものゝ出版物は思想伝播の重要な媒体であったと言えるのである。

(1) パンフレットの定義については後述参照。プロードサイドについては、折らないままの全紙で、ふつう片面に印刷されたものを指すが、用紙の大きさを問わない場合もある。John Feather, *A Dictionary of Book History* (London & Sidney: Croom Helm, 1986), p.49.

(2) たとえば、リンダ・コリーは、プロテスタントイスマがイギリスに浸透した背景に、反カトリックの安い印刷物が大量に流布し、広く民衆に読まれていた点を指摘する。

Linda Colley, *Britons: Forging the Nation 1707-1837* (New Haven and London: Yale University Press, 1992), p.20 (川北稔監訳『イギリス国民の誕生』名古屋大

学出版会、二〇〇〇年、二三頁)。また、ハネディクト・アンダーソンも「プロテスタントティズムと出版資本主義の連合は、廉価普及版の開拓により、ふつうミナシ語をほとんど知らなかった商人、女性を含め、大規模な新しい読者公衆を急速に創出し、かれらを政治宗教目的に動員した」と安く出版物の重要性を強調してこそ。Benedict Anderson, *Imagined Communities. Revised edition* (London: New York: Verso, 1991), p.40 (白石やや・白石隆訳『増補 想像の共同体』NTT出版、一九九七年、七九一八〇頁)。

(3) 原タイトルは次の通り。① *A Compleat Catalogue of All the Stitch'd Books and Single Sheets Printed since the First Discovery of the Popish Plot, (September 1678) to January 1679/80. ...* (London: [n.s.], 1680) ② *A Continuation of the Compleat Catalogue of Stitch'd Books and Single Sheets, &c. Printed since the First Discovery of the Popish Plot, September 1678, from the 1st of January 1679/80, to the 25th of June, 1680. ...* (London [n.s.], 1680) ③ *A Second Continuation of the Compleat Catalogue of Stitch'd Books and Single Sheets Printed since the First Discovery of the Popish Plot, (September 1678) from the 24th of June to Michaelmas Term*

1680. ... (London: Printed by J. R., 1680)。そして再発行版は④ *A General Catalogue of All the Stitch'd Books and Single Sheets &c. Printed the Two Last Years, Commencing from the First Discovery of the Popish Plot, (September 1678) and Continued to Michaelmas Term 1680. ...* (London: Printed by J. R., 1680)。

(4) Edward Arber, ed. *The Term Catalogues, 1668-1709 A.D.; with a Number for Easter Term, 1711 A.D.* (London, 1903-6), v.1, pp.386, 406。『続編1』の記事もシケルマス・ターム号に掲載されているが、その価格については触れられていない。Ibid., v.1, p.419。

(5) ラトレルは自分か購入した書物には購入日と購入価格を書き入れる習慣があり、ラトレル手沢本に書誌が採録されている小冊子類で、ラトレルの書き入れがある現存資料の中に、ラトレル手沢本と同じ日付、同じ価格、ほぼ同内容の解題が記されているものが存在したことが、手沢本制作者をラトレルと特定する根拠となった。F. C. Francis, "Introduction", in *Narcissus Luttrell's Popish Plot Catalogues* (Oxford: Basil Blackwell, 1956), pp.1-15。

(6) 『平々本』とは折丁の折の目に近い余白の厚み部分を貫いて糸でとじた本のことである。三三目と同じが多々、表紙はなりか、青色か茶色の紙をへらんで表紙にしてある。

- た。ハンフレットにやむへ使われた綴じ方でもあったため、ハンフレットの別称として使われた。D. Foxon, "Stitched books", *The Book Collector*, XXIV (1975), pp.111-4; Bernard C. Middleton, *A History of English Craft Bookbinding Technique*. 3rd ed. (London, 1988), p.110.
- (7) 10 Anne, c.18, CXIII, *Statutes of Realm* (London: Dawson, 1963), v.IX, p.617; D. Foxon, "Stitched books", pp.112, 116-7.
- (8) 田録自体にはブロードサイドと「折判」の区別はなく単に〈folio〉とあるため、様々な書誌類を参考として両者に分けた。
- (9) ラトルルの書き入れがあるローは「ハーヴェー大書ホートン図書館が所蔵されている」。なぜ「Wing L2233」は Donald Wing, ed., *Short-title Catalogue of Books Printed in England... 1641-1700*. 2nd ed. (New York, 1982-88), 4 vols. の参照番号である。以下同様。
- (10) ラトルルによる「事件の現状と、カトリックの専制的政府を導入しようとする計画を描いた一編」という解題あり。
- (11) ラトルルによる「レスターレンジにやむて書かれた。いくつかのことで下品な一編」という解題あり。なお、『ターム・カタログズ』の一六八〇年イースター・ターム部では一冊が「エドワード・アーバー」
Edward Arber, ed., *The Term Catalogues*, v.1, p.398.
- (12) シェンメンは「図版が入っていたり、音楽書や法律書、詩集や戯曲といった特定ジャンルの書物の場合などは標準的な書物からの題曲と異なる註解がついて」Francis R. Johnson, "Notes on English retail book-prices, 1550-1640", *The Library*, 5th ser., vol. V (1950), pp.89-93.
- (13) cf. Jeremy Boulton, "Wage labour in seventeenth-century London", *Economic History Review*, 2nd ser., XLIX (1996), pp.273-4; Donald Woodward, *Men at Work: Labourers and Building Craftsmen in the Towns of Northern England, 1450-1750* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995), pp.131-8; Margaret Spufford, "The cost of apparel in seventeenth-century England, and the accuracy of Gregory King", *Economic History Review*, 2nd series, LIII (2000), pp.677-705.
- (14) Jeremy Boulton, "Food prices and the standard of living in London in the 'century of revolution', 1580-1700", *Economic History Review*, 2nd ser., LIII (2000), pp.457-8.
- (15) 単位の換算には次の文献を参照した。Ronald Ed-

- ward Zupko, *British Weights & Measures* (Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1977); Colin R. Chapman, *How Heavy, How Much and How Long?* (Dursley: Lochin Publishing, 1995).
- (16) Boulton, "Wage labour", pp.268-90.
- (17) Ian W. Archer, *The Pursuit of Stability: Social Relations in Elizabethan London* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991), pp.190-4.
- (18) アーチャーは子供が一人いる場合の推計値も求めているが、この場合子供の食費は大人同様病院の食事シートから組み立てず、教区史料から直接データをとり出している。
- Archer, *The Pursuit of Stability*, pp.191-2. したがってここでは大人一人あたりの食費のみを扱う。なお、一八世紀前半のロンドン勤労者家族の支出構造を示したヴァンターリントの場合、子供の食費を大人と同等に扱っている。
- Jacob Vanderlint, *Money Answers All Things* ... (London: Printed for T. Cox, and sold by J. Willford, 1734), pp.75-6 (浜林正夫、四元忠博訳『貨幣万能』東京大学出版会、一九七七年、一〇〇-一頁)。
- (61) Boulton, "Food prices and the standard of living in London", p.464, table 4, note.
- (62) George E. Barnett, ed., *Two Tracts by Gregory King* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1936), p.31. 著名なこの一覧表では、労働者や小屋住農など一八三万人弱(全体の五一%)が「王国の富を減少させるもの」としてまとめられており、一人あたりの年収は三ポンド三シリング、支出は三ポンド七シリング六ペンスとされている。一人あたりに換算すると、収入は二・一ペンス、支出は二・三ペンスである。キングの統計値の信頼性についてはTom Arkell, "The incidence of poverty in England in the later seventeenth century", *Social History*, vol.12 (1987), pp.24-9, を見よ。
- (63) cf. Henry B. Wheatley, ed., *The Diary of Samuel Pepys* (London: George Bell & Sons, 1893-9), 10 vols.
- (22) 拙著『書物の地方史の試み』一橋大学社会科学古典資料センター Study Series No.44、二〇〇〇年、一七頁。

二〇〇二年八月二日受稿
二〇〇二年十月三日レフネリーの審査を経て掲載決定

(社会科学古典資料センター助手)